『はくぶつかん』にみる昭和50年代前半の東大阪市立郷土博物館（下）

長　谷　洋　一

前回は、同館が昭和51年度に専門職員２名が退職、特別展示予算がゼロ査定になったことを記した。

12号（昭和52年４月）は、『はくぶつかん』創刊３周年記念号である。前年10月に館長となった榊原亮氏の「郷土と博物館」と題した現状紹介を掲載し、施設・職員数・予算の問題などで計画通り事業が進んでいないことが記された。また昭和50年度と51年度の入館者推移が示され、昭和50年度は11393名であったのに対し51年度は9819名で、その原因として秋の特別展が不開催であったことが大きいとし、「創意工夫も限界」と職員の心情が吐露されている。

続いて「小さなはくぶつかんの大きな使命」と題して館の使命や問題点が綴られる。同様の内容は既に１号や４号で示されたが、「郷土というものを重視した博物館として各方面の自治体関係者や一部の研究者の人々から注目を受けたものの地域の人々からの注目はあまりなく」、財政難の時を迎えて、「むしろ市としては、分相応な施設、あるいは資料館的なものに〈格下げ〉しては」などの声も聞かれると記している。そして大きな課題としては、“展示したものを見にこられるのを待つ”だけではなく「主として地域（東大阪市民だけではない）を対象に質的な充実を前提として博物館の方から積極的に働きかけ、あるいは学習の機会をつくることによって多くの人々に気軽にきていただけて学習ができる学習条件やその内容をもった博物館にしていくこと」が掲げられている。

『はくぶつかん』12号

14号（昭和52年11月）は「開館５周年記念号」と題され市制10周年・開館５周年記念の特別展示「郷土の文化遺産」に関する内容で占められた。「郷土の文化遺産」展は各指定文化財やそれに準ずる資料を展示したもので、考古資料のほか、絵画工芸、仏教美術、河内木綿、民俗資料、古文書など多岐にわたる実物資料のほか、古建築などの写真パネル、神感寺跡模型などが展示された。誌上では、河内木綿の「下機」の模型を作り実際に布を織った報告や神感寺跡模型の製作過程などが綴られている。「特別展雑感」では「今回の特別展のとりくみの中に、私は本館の歩むべき道をみたように思う」と締めくくっている。

しかし16号（昭和53年３月）では、「不況の中の小さな博物館」と題され、「長期の不況下で市の財政は赤字再建団体と同一の状況にある」とする財政方針のもと「社会教育のように法律で義務づけられていない事業についてはかつてのように総花的な方針はやめて、社会教育部内でよく精選してもらいたい」という方向が示されたことを伝えている。

17号（昭和53年４月）では、前年度観覧者数が紹介され、前年度観覧者は14935名で過去最高の観覧者数を迎えたが、その要因として特別展のほかに、郷土史講座・考古学教室や史跡見学会の開催、“郷土に綿の花を咲かそう”という運動で希望者に綿の種を配布したことなどが掲げられている。しかし台所事情は悪化しており、

特別展示や普及教育活動に関する予算、図書・備品購入予算などは再びゼロ査定となった。

それでも誌上では、「河内の史跡をたずねて」「展示資料紹介」「河内かわらばん」などの連載記事に加え、「河内名所図会」（18号）や19・20合併号（昭和53年８月）では「暗越奈良街道」と街道沿いの道標調査、あるいは建築家中村順平の紹介などが誌面を飾っている。

手元の『はくぶつかん』は19・20合併号で終わっている。東大阪市立図書館で確認したところ33号（昭和57年５月）で終了している。

その後、東大阪市立郷土博物館は平成８年に（財）東大阪市文化財協会による管理・運営となり、平成18年には指定管理者制度が導入され、現在、鴻池新田会所などとともに東大阪市文化振興協会が管理・運営している。

長々と初期の『はくぶつかん』を振り返ってみた。『はくぶつかん』の愛読者であった筆者は後年、府下の博物館に勤務したが、財政方針を前提に「総花的な方針はやめて、社会教育部内でよく精選してもらいたい」など、財政事情に翻弄される博物館を実体験することも多かった。

いうまでもなく地域の博物館は地域住民あっての存在である。今日では「“展示したものを見にこられるのを待つ”」の博物館は存在しない。各種講座・講演会や体験学習会などの開催、学校への出前講座などさまざまな教育普及活動が行われている。

『はくぶつかん』19・20合併号

しかし自己反省も踏まえつつ振り返ると、本当に地域の博物館が地域住民の期待や学習機会に応えていたのだろうかと疑問が生じる。

例えば「横矧板鋲留短甲」に「よこはぎいたびょうどめたんこう」とルビを打っただけのキャプションや解説に、来館者はどれほど理解しているのだろうか。あるいは古文書や民俗資料などに関心ある地域住民に博物館はどれほど応えることが出来ているのだろうか。

学芸員資格を得て市町村の文化財関係や博物館に奉職する人も多いが、業務につきながら専門分野のみに固執するのも地域住民にとっては失礼な話ではないかと思う。多くの文化財関係部局は文化財課や生涯学習課（社会教育課）、博物館も「歴史民俗資料館」「博物館」で、地域住民からすれば職員（学芸員）個人の専門分野はあまり意味をもたない。専門を疎かにするのは論外だが、時に研究報告展示と見紛うほど専門用語が羅列した展示も見受けられる。これでは十年一日ではないかと、かつての愛読者は思う。

文化財関係の仕事に奉職した以上、専門分野に精通しつつも少しでも地域に関する周辺分野や他の文化財に関心を広げていく努力が肝要ではないかと思う。『はくぶつかん』で紹介された文化財は展示資料のみならず大和川や奈良街道など多岐にわたり、その集成が「郷土の文化遺産」展となり過去最高とされた観覧者数に繋がっていた。地域住民の多彩な文化財への関心が博物館へ足を運んだことになる。

学芸員が少ない市町村の博物館は、どうしても専門分野偏重の展示になりがちである。厳しい言い方ではあるが、学芸員の専門分野＝地域全住民の関心ではない。学芸員が周辺分野や他の文化財にも関心を広げる努力をしない限り、来館者数は増加しないし博物館の存在も問われるだろう。専門分野の展示であればなおさら平易な解説を心がける必要があるのではないか。

35年前ながら『はくぶつかん』の赤裸々な記録は現在も色褪せていないと感じるのである。

博物館運営委員　文学部教授